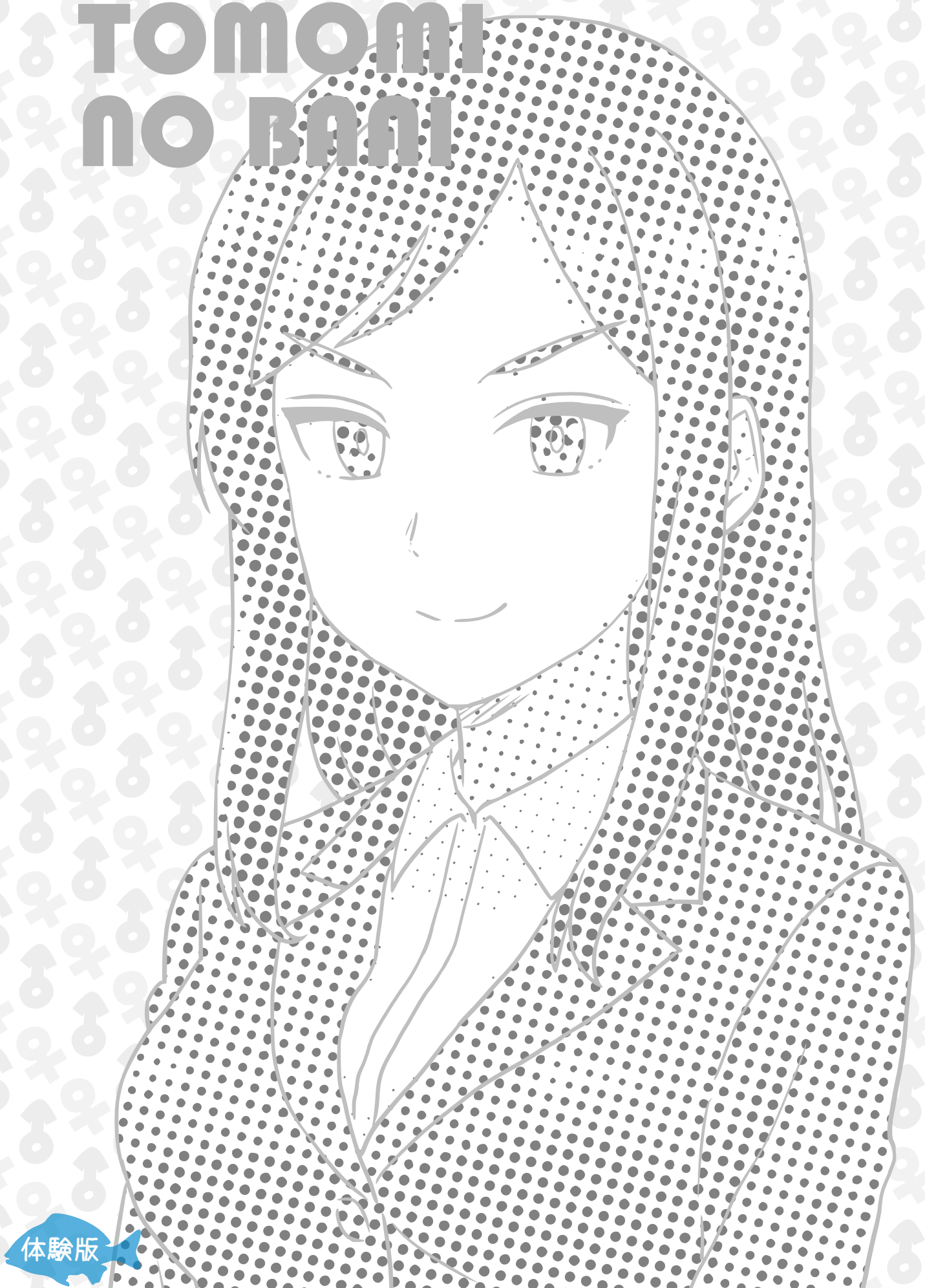
TSFで孕み系

恋愛
男女逆転
幸せエンド

ムラカミトモミの場合

体験版

MURAKAMI TOMOMI NO BANI



体験版

目次

登場キャラクター……4ページ
第1章　立場逆転……5ページ
第2章　無人工場の男女……23ページ
第3章　受容……47ページ
第4章　解放……64ページ
第5章　産休……75ページ
あとがき……86ページ
作品紹介……87ページ

体験版

登場キャラクター

■　村上　智晴／智美（ムラカミ　トモハル／トモミ）

主人公。社会人三年目。新人の指導を担当する。
商社の無人工場を運営する部署に勤めている。
陰キャで理系。仕事が速い。

■　田辺　香里／薫（タナベ　カオリ／カオル）

社会人一年目。新入社員。主人公を慕っている。
図太い。体力が自慢。陽キャで元ヤンっぽい。

体験版

第1章　立場逆転

体験版

身体が女になって数時間が経った。
下半身は服を脱いでいる。上半身には、後輩が持ってきたブラジャーとシャツを着けている。無人の工場とはいえ恥ずかしい。そもそも俺はなぜ、ゲームの指示に従っているのか疑問を持った。
「先輩、座って足を開いてください！」
元気のよい男の声が響く。
仕方がない。工場の外周の廊下で、俺は壁を背にして座った。
「それじゃあ、『Eゲーム』のチャレンジをおこないましょう。五分間、クリトリスを口で吸引します。私は、先輩の股に顔をうずめて時計を見られませんから、時間の確認は先輩がしてください」
「なあ。これ、本当にやらないと駄目なのか？」
やる気満々の後輩に、いちおう尋ねる。
「当然ですよ。ポイントをためないと、ここから出られないんですから。そういうゲームに巻き込まれてしまったんですから、やるしかないんです。ほら、先輩、足を開いてください」
膝をつかまれ、両脚を開かされた。股間がぬらぬらと濡れている。そのことが恥ずかしくて顔を両手で覆った。
「先輩、隠すべきは顔ではなく股間の方なのでは？　大事なところを、なにも隠していな

体験版

いですよ」
確かにそうだ。自分の間抜けな行動が恥ずかしくなる。照れ隠しに顔を覆ったまま、指をわずかに開いて後輩の顔を見た。
「バカ」
赤面しながら小さく罵倒の言葉を投げかけると、後輩は嬉しそうに笑みを浮かべた。
俺は男のとき、村上智晴（むらかみともはる）という名前だった。女になった名前は村上智美（むらかみともみ）。後輩は女のとき、田辺香里（たなべかおり）という名前だった。男になった名前は田辺薫（たなべかおる）だ。
今の俺の姿は、田辺の評では、黒髪のかわいい真面目そうな女らしい。田辺の容姿は、スーツが似合う陽キャといった感じだ。
俺たち二人は仕事で無人工場に来た。そして、謎のアプリ『Eゲーム』のせいで工場内に閉じ込められてしまった。脱出には、チャレンジリストの性的なプレイをこなして、合計１００ポイントを集めなければならない。このゲームの開始から数時間が経った。二人はたがいの服を交換して、ポイント獲得に励んでいる。
俺は自分のスマホを左手で持ち、時計アプリのタイマーを表示した。
「まずはクリトリスを露出させますね」
田辺は俺の陰部に指を置いて左右に広げた。陰核が露出し、周囲の空気の流れを感じる。田辺の息がかかって、ひくひくと切なそうに動いた。
「もう勃起していますね。赤く腫れ上がったみたいになっています」

体験版

「実況はいいから、やることを早くやってくれ」
「あれー、期待しているんですか？　それじゃあ期待に応えて、しっかり吸引するっすね」
田辺は嬉しそうに股間に顔を押しつけた。唇が陰唇をかきわけて、クリトリスを探り当てる。田辺はストローでジュースを吸うように、小さな突起を吸いはじめた。
「ふわあぁぁっ！」
腰全体が持って行かれそうになり声を上げる。田辺は舌を動かしてクリトリスの先端をいじめてくる。頭の中で快感がパチパチと爆ぜる。なにも考えられず脳が快感で埋まっていく。
田辺が手を上げ、俺のスマホを指差してきた。なんだろうと思い、そうだったと思い出す。
タイマーを開始していなかった。ボタンをタップして五分間の計測を始める。そこまでしたところで、また声を上げてしまった。
「ふうぅ、ふうぅぅぅぅ」
クリトリスを強く吸われるたびに声を上げてしまう。その合間に突起を甘噛みして舌を転がしてくる。こいつ、なんでこんなに上手いんだ。付き合った異性の数が違うからだろうか。俺はこれまで誰とも付き合ったことがない。田辺は経験豊富なようだ。俺はいいように責められている。抵抗のしようがなかった――。
「――先輩、先輩、目を覚ましてください。五分経ちましたよ！」

体験版

ほっぺを、ぽんぽんと叩かれて意識を取り戻した。
「ふえっ」
思わずかわいい声を出してしまう。快感の強さで意識を飛ばされた。脳がフリーズしてしまっていたようだ。
《コングラチュレーション！　チャレンジ『クリトリス吸引』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》
田辺のスマホから女性の声で通知が響いた。これで開始から11ポイント目を手に入れた。
「先輩、クリトリスが真っ赤に腫れ上がっています」
指でゆっくりとなでられた。
「ひやぁぁぁぁぁぁ！」
快感が背筋を伝わり脳まで響く。
「先輩、まだまだこれからっすよ！　100ポイントためないと、ここから出られないみたいですから。がんばりましょう！」
明るく田辺は言った。
「ははっ」
乾いた笑いが漏れる。セックス初心者の俺と、経験豊富な田辺。この二人でのプレイは、俺の負担が大きすぎるのではないか。

体験版

本当にいったいなぜ、こんなことになったのだろう。発端は、会社の出張だった。
山間部に建てられた無人工場。水耕栽培で野菜を作る自動システム。商社の次世代農業プロジェクト。全てがオートメーション化されている事業だがイレギュラーは発生する。その調査をして解決するのが俺の仕事だ。
入社三年目の俺は、指導している新人の田辺と、この工場にやって来た。そこで壁にペンキで描かれたQRコードを発見した。田辺がスマホで読み取ると『Eゲーム』が勝手にインストールされて始まった。その謎のアプリのせいで性別が変わり、性的な脱出ゲームに巻き込まれたのだ。
「先輩、チャレンジリストが更新されています。一緒に確認しましょう！」
田辺は床に正座してスマホの画面を見せてきた。
――中出しセックスをする。1ポイント。
――アナルセックスをする。1ポイント。
――尿道セックスをする。1ポイント。
自分の顔が真っ赤になったのが分かる。これはさすがに無理だというものが並んでいる。
「なあ、田辺。少なくとも最後の一つは、物理的に無理だろう」
「そうっすね。私が女だった時でも、無理だったと思います」
「それにアナルは壊れたら困る」
「出し入れする場所じゃないですしね。壊れたら糞便垂れ流し生活になりますし、やめた

体験版

方がいいですよ」
「この中では、最初の項目が一番ましだとは思うが」
顔を赤らめながら小さな声で言う。
「どれっすか？　聞こえないっす！　もっと大きな声で言ってください！」
手を上げて田辺は明るく言う。
こいつ、と俺は思う。どうやら田辺は天然のＳらしい。女のときから俺に迫って反応を楽しんでいた。男になってからは露骨に言葉責めをするようになった。
「ほらあ、先輩、どれをやりたいか言ってくださいよ～」
田辺は、勝手に俺のクリトリスをなでながら尋ねてくる。
「人のクリトリスをいじるな！」
「先輩、嬉しそうな顔をしていますよ！」
にやけた顔で、クリトリスをきゅっ、きゅっ、とつまんできた。そのたびに俺は切ない声を漏らして身体を痙攣させた。
「それで、先輩。このチャレンジリストの中で、どれをやりたいんですか？」
田辺はにやにやしてこちらを見ている。
「な、中出しセックス……」
羞恥にまみれながら質問に答える。
「なーんだ、先輩。中出しセックスをして欲しいなら、早くそう言ってくださいよ」

体験版

滅茶苦茶楽しそうに田辺は言う。
怒った顔を向けたら、唇を重ねてこられた。口を塞がれたせいで苦情の言葉を出すことができない。
「ぷはあ」
俺がしゃべるのを諦めたら、田辺は解放してくれた。
「先輩、たっぷりと中に注ぎこんであげますよ」
田辺はズボンのファスナーを下ろして、ペニスを露出させる。スーツ姿に男性器だけを突き出した状態になる。
「本気でやるつもりなのか？」
「私、女のときから、ずっと言っていましたよね。先輩を恋人にしたいって。その気持ち、男女が逆になっても変わらないっすよ。私、先輩が大好きですから」
あごを指で持ち上げられて唇を重ねられた。舌を入れられて、全身の筋肉がゆるんでいく。
「うわっ、先輩。下がびしょびしょですよ。もしかしてMってやつですか？」
恥ずかしさで耳まで真っ赤になる。
「先輩の初めて、私がもらいます」
抱え上げられて股にペニスがあてがわれた。田辺は俺の体をゆっくりと下ろす。
愛液にまみれた膣口が開き、肉の壁が押し広げられて男性器が入ってくる。痛みはなか

体験版

った。まるでセックスをするために作られた体のように気持ちがよかった。
「これ、まずいっす。マジで気持ちいいっす――」
田辺が余裕のなさそうな声を出す。
「先輩はどうっすか？　痛かったりしないですか？」
「ふあぁぁ……」
返事をしようとしたが、声がまともに出なかった。
「あー、めっちゃ、とろけている顔っすね。気持ちよすぎって表情していますよ。これなら、すぐに動かしても大丈夫そうっすね」
俺は抱え上げられて対面座位の状態になっている。体は力が抜けてふにゃふにゃになっている。自分では姿勢を保てない。下半身に刺さったペニスと、田辺の両腕でどうにか体勢を保っている。
「上下に動かしますね」
両脇の下を手の平で持たれた。そのまま、大人が子供を高い高いするように、体を上げ下げされる。そのたびに膣内をこすられて子宮口を小突かれる。快感が脳に響き渡る。刺激を感知するセンサーに、体がなっているようだった。
「先輩、私の名前を呼んでください」
「――田辺」
「そっちの名前じゃなくて下の名前。男の名前で呼んでください」

体験版

「――カオル」
お腹の中のペニスが一回り大きくなった。自身の男性を意識して興奮しているのだろう。
「お返しに、先輩の女の名前を呼んであげますね。――トモミちゃん」
ゾクッとした。頭のスイッチが切り替わり、男の自我のかわりに女の本能が現れた。
気持ちいい。全てを任せてしまいたい。
両手を田辺の背中に回して抱擁する。開いていた足を、田辺の背中に回してホールドした。体内の男性器が張り詰める。交わっている男と唇を重ねる。俺は全てを受け入れる肉の筒になる。
「出ます！」
唇を離した田辺が短く叫んだ。体内に溶岩を投入されたような熱を感じた。田辺のスーツを着た男の体にしがみつく。精液を一滴残らず受け止めるように全身を引き締めた。
背中を強く引き寄せられ、たがいに体を密着させる。しばらく同じ姿勢のまま時間を過ごした。余韻が引くように、膣内に入ったペニスが、徐々に小さくなっていくのが分かった。
「滅茶苦茶出ました！」
ペニスを入れたまま、嬉しそうに田辺は言う。
「どうでした、先輩！」
太陽のような顔で、こちらの感想を聞こうとする。

体験版

「気持ちよかった」
顔をそらして、表情を見られないようにしながら答える。
あごを指で持たれた。そして、無理矢理田辺の方を向かされる。
「私の顔を見ながら言ってください。私とのセックス、どうでしたか？」
「だから、気持ちよかったって、言っただろう。すごく興奮したよ。これでいいか？」
すねたように視線をそらしながら言った。
また、からかうような受け答えをするのだろう。そう思っていたら、少し間があった。
「――よかった。いやだったと言われたら、どうしようかと思っていましたから」
田辺は笑顔を見せる。その目の端に、わずかに涙がにじんでいることに気がついた。
俺は田辺の心の内を考える。田辺はずっと、俺に好きだと言っていた。男女逆転したとはいえ、その相手との初セックスだ。不安があってもおかしくはないだろう。
「よくできた」
褒めてやり、頭をなでてやった。田辺は嬉しそうに顔を輝かせて、ぎゅっと抱き締めてきた。
《コングラチュレーション！　チャレンジ『中出しセックス』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》
田辺のスマホからチャレンジ達成の通知が流れる。ペニスを挿入して抱き合ったまま、田辺はチャレンジリストを表示する。二人で見るとリストの内容が変わっていた。先ほど

体験版

までの内容が一変して、新しい項目になっていた。
――69をする。1ポイント。
――駅弁で工場の外周の廊下を一周する。1ポイント。
――フェラをしながらおしっこを飲む。1ポイント。
「先輩、次はどれがいいっすか？」
楽しそうに田辺は尋ねてくる。
「うぅん。三番目はないな。二番目もちょっと難しいし。この中だと一番目かなあ。いや、ないなあ」
決められず悩む声を出す。田辺の顔を見ると、にんまりと笑みを浮かべていた。
「どうしたんだ？」
疑問を持って尋ねる。
「私、なんか男の人の気持ちが分かりました。女の子がかわいいなって思う瞬間。先輩を、ちょっといじめたいなって思うときですよ」
俺は目を細めて、ポカリと田辺の頭をたたく。女の非力な力では、ほとんどダメージを与えられなかった。田辺はくすくすと笑った。
「なんだ？」
ちょっと怒ったように言う。
「先輩、私のペニスを刺しているのに、いつものように叱ってきて面白いなあと思って」

体験版

赤面すると、膣内のペニスがむくむくと大きくなった。こいつ、俺が恥ずかしがるとペニスをふくらませるのか。
「このまま抜くのは嫌っすね」
「いや、いつかは抜かないといけないだろう」
「駅弁で工場内を一周しましょう。先輩は裸になってもらいます」
「えっ？」
左腕で背中を固定され、右手でシャツとブラジャーを脱がされた。スーツ姿の男性にペニスを刺されて裸になる。
俺は両手を組んで輪を作らされて、田辺の首にかけさせられた。田辺は、俺の両脚を開かせ、腰と尻を持って立ち上がる。AVなどで見たことがある駅弁の姿勢だ。
「この体、けっこう筋力あるっすね」
「俺が男の時よりも、たくましいんじゃないのか？」
「もしかしたら、男女逆転して、ちょうどいい感じになったのかもしれないっすね」
「そんなことはないだろう」
男としてのプライドからそう言った。
田辺は俺をぶら下げて歩きだす。最初の数歩はぎこちない感じだった。だんだんコツをつかんできたのか徐々にリズミカルになっていく。
田辺が足を動かすごとに身体が揺らされ、膣内のペニスの位置が変わった。そして一歩

体験版

踏み出すごとに、体が縦に弾んで腹の奥を小突かれる。
口を開くと声が出そうなので無言になった。手を放さないように集中して田辺にすがりつく。膣奥をトントンと叩かれながら、裸で工場内を移動する。
「あっ、先輩。外はもう真っ暗っすよ」
大窓の前に来た時、田辺が外を見ながら言った。
横を向くと、床から天井までの大きな窓の先は闇になっていた。窓は屋内の照明のせいで鏡になっており、自分と田辺の姿が映し出されている。
俺のスーツを完璧に着こなしている田辺。そのペニスを刺されて、大股を開いている裸の俺。羞恥に全身が震える。膣全体が、きゅうっと収縮した。頭の中がぐるぐると回る。自分はなんて痴態をさらしているんだと思った。
「これ、もしかして外から丸見えなんじゃないのか？」
「そうっすね。でも、ここらへん、人は住んでいないっすよ。見ているとしても、鳥とか動物とかぐらいのはずっすよ」
それは知っている。理屈の上では分かる。しかし現に今、痴女のような姿で窓の前にいる。もし間違って誰かが来れば、この恥ずかしい姿を見られてしまう。
「お、おろしてくれ」
「駄目っすよ。まだ一周していないっすから」
「じゃあ、早く窓から遠ざかってくれ」

体験版

「あっ、先輩。もしかして、人に見られると思っているんですか？」
田辺は俺を抱えたまま窓に近づく。そして俺の背中を窓に向けた。
「外から見たら、つながっているところが丸見えっすよ」
裸の背中、サイドから見える押し潰されたおっぱい、くびれた腰に広い臀部。お尻には肛門があり、その下には広げられた大陰唇がある。
田辺のスーツのズボンからはペニスが出ており、俺の陰部に突き刺さっている。先ほどの精液と愛液が混ざった白濁液が、歩くたびに少しずつ糸を引いて垂れている。
「先輩、もしかして露出プレイで興奮するタイプっすか？」
「ち、違う」
「先輩の『違う』とか、『そうじゃない』とかいう台詞は、イマイチ信用できないんすよね。自分がどんな顔をして言っているか知っていますか？」
どんな顔？　自分で自分の顔は見えないから分からない。
「向きを変えましょうか」
田辺は向きを百八十度変えた。田辺の背中越しに、鏡になった窓が見える。自分の顔が映っていた。汗をかき、目はとろんとしていた。口元はだらしなく開き、締まりのない表情をしている。
「少し揺らしますね」
トントントンと上下に体を弾ませる。そのたびに表情はゆがみ、顔は赤らみ、吐息を漏

体験版

らしている。
「先輩、反応がいいから、見ていて楽しいんっすよ」
「バカ」
そこまでしか言えなかった。必死に首にすがって落ちないようにする。揺すられると考える余裕がなくなった。
「早く、一周回って、解放してくれ」
途切れ途切れに声を出す。
「犬がマーキングするみたいに、いろいろな場所で中出ししていいっすか？」
なんてことを言うんだ。いったい、どれだけの時間をかけて工場を回るつもりなんだ。
それに、そんなに何度も射精できるものではないだろう。
「『Eゲーム』で男になってから、性欲がありあまっているんっすよ。たぶん、一日に十回とか二十回とか射精できると思います」
田辺の言葉にぞっとする。そういえば自分の体も破瓜の傷みがなく、すぐに快感を得られた。『Eゲーム』によって与えられた体は、セックスをすることに特化したものなのか。
「まず、ここで一回射精しますね」
上下のピストン運動の速さが増した。落ちないように必死に首にすがりつく。しがみついていると男のにおいを強く感じた。裸になっている自分も、女のにおいを発散させているのだろう。

体験版

膣内のペニスが大きくなった。ごしごしと肉壁をしごかれる。摩擦の熱が全身に広がる。温かい快感が背筋を通って脳まで上がってくる。

「そろそろ出します。全部受け止めてください」

無言で顔をそらして首肯する。亀頭の先がふくらんだ。ザーメンが発射された。熱い塊が子宮の入り口を叩くのが分かった。

「おうふっ」

濃厚な粘液に、上の口がげっぷを漏らす。体の中全体に白い液を注ぎこまれた気がした。自分の体が、精液の水風船になっていると錯覚した。

ピストン運動がやんだ。涙の混じった目で窓に映る自分の姿を見る。髪が乱れていた。髪の何本かが、汗で皮膚に貼りついていた。目の周りは度重なる涙で赤く腫れていた。頬の筋肉はゆるみ切っていた。口元はだらしく開き、よだれを垂らしている。化粧もしていないすっぴんの顔。セックスでぐちゃぐちゃになった淫欲まみれの表情が映っていた。

「先輩、自分がエロい顔をしている自覚ありますか？」

「はあ、はあ――、おまえがエロい顔をさせているんだろう」

「次は監視カメラの前で中出ししましょう」

そうだった。施設内は全てカメラが稼働している。それらは記録され、外部から確かめることができる。誰かが今、この工場の映像データを確かめたら、全てが見られてしまう。

「あっ、中が締まりましたね。やっぱり先輩、Mなんですね」

体験版

「違う、映像データが流出するからだ！」
「大丈夫っすよ。外部と通信できないじゃないですか。あとで消せばＯＫですよ。まあ、いつ通信ができるようになるか分からないですが」
今この瞬間に通信が回復するかもしれない。そうなればジ・エンドだ。
駄目だ。こいつと一緒にいると、どんなトラブルを抱え込むか分からない。
田辺が歩きはじめた。一歩進むたびにゴツン、ゴツンと奥をノックされる。こいつ萎えないのか。無限の射精能力を持っているのか。
無人工場から脱出するためには、１００ポイントを稼がないといけない。これまで出てきたチャレンジは全て１ポイントだった。残りは８８ポイント。それまで自分の体は持つのだろうかと考えた。

体験版

第2章　無人工場の男女

体験版

中堅の真崎商事に入社して三年目になった。俺、村上智晴が現在所属しているのは、野菜の無人工場を運営する部署である。いずれは全ての野菜を工場内で作ることを目標にしている先進的な事業だ。何よりも、食糧を安定的に供給することは、商社の社会的な役割から考えれば有益なことだ。

この会社では、三年目の社員は新入社員の指導をおこなう。そのことは知っていたし、真面目にやろうと思っていた。俺のところにやって来たのは、今年入社した田辺香里という女性だった。

「先輩、よろしくお願いします！」

第一印象は、学生時代は、女性にもてたのだろうなというものだった。

高い背、女っぽくないスマートな体型。かわいいというよりは、かっこいい立ち姿。武道でもやっていそうな骨太な骨格。小魚をたくさん食べて育ったに違いないと思った。

まあ、あまり女性的でない方がいい。商社は体力勝負のところがある。男勝りの方がよいだろうと思った。

ただ、田辺は今どきの若者だ。あまり厳しい指導は心が折れるかもしれない。俺も今どきの若者ではあるが、少しばかり経験値がある。だから優しく懇切丁寧に指導をした。各所の無人工場を巡っては、細かく仕事の説明をおこなった。

ある工場に二人で行き、備品を補充した帰りのときだった。工場は田舎の僻地にあることが多い。土地が安く、水が豊富な場所を選ぶからだ。俺が運転して、田辺が助手席に座

体験版

っていると、何気なく声をかけられた。
「村上先輩は、彼女とかいるんですか？」
おいおい社内恋愛とか勘弁してくれ。振った振られたのドロドロの恋愛劇を、入社してから何度も見てきた。
商社ということで、社員はやたらとアクティブな人間がそろっている。恋愛も肉食系が多い。俺は草食系なんだ。波瀾万丈な大恋愛とかは求めておらず、自動で生産される植物を見ている方が、心が落ち着く人間なのだ。恋愛パワーゲーマーたちのチキンレースに巻き込まないでくれよと思った。
「彼女か？　その情報は業務に必要なのか？」
「ありありっすよ！　先輩の恋愛事情は把握しておきたいじゃないですか」
「それ、仕事にまったく関係ないだろう」
「結婚していないのは知っています。社内で聞いて回りましたから」
「おいおい」
「恋人については分からないんですよね～。秘密主義ってやつですか？　先輩って、もしかしてミステリアス系？」
「仕事とプライベートを、きっちりと分ける方なんだよ」
「クールっすね」
「いちおう俺は指導担当だからな。あまり砕けすぎた言葉はどうかと思うぞ」

体験版

「先輩と、距離を詰めたいんすよ！」
元ヤンか？　素のしゃべりを聞いてそう思った。
そう考えれば合点がいくことが多い。武道をやっていたように見える体格。体力馬鹿で負けず嫌いの性格。上の指示には従順に従う。しかし、これぞと思った上の者との距離感はバグっている。
やれやれ。俺は学生時代は陰キャだったんだぞ。こうした陽キャとは距離を取って日々を過ごしてきたんだよ。
運転しながら、しばらく無言になった。無視をしていたら黙るだろうと思ったからだ。
少しばかり声を交わさなかったが、次第に心苦しくなってきた。さすがに無視はいかんなと思い、横を向いて田辺の様子を窺った。田辺は、ものすごい笑顔で俺を見ていた。
「はあぁ。田辺、おまえ、いつも楽しそうだな」
「うっす。先輩といつも一緒ですから！」
「そうか」
これは、きちんと距離を置かないといけないな。セクハラ案件に巻き込まれないようにしようと用心した。

◆

体験版

「村上くん、群馬の工場、なんか調子悪くてね。一週間ぐらいかけていいから、徹底的に調査してくれないか」
上司に呼ばれて頭を下げられた。野菜の無人工場の部署にはそれなりの人数がいるが、トラブルはだいたい俺に回される。細かな機械やシステムについて対処できる人間が俺ぐらいしかいないからだ。営業は他のメンバーの方が得意だが、工場周りの管理や業者との連携は俺の独壇場だ。
「田辺は置いていった方がよさそうですね」
一週間というのは泊まりがけでの対処ということだ。無人工場は、地元の警備会社の見回り以外は、基本は無人で動かしている。つまり誰もいない場所で、男女二人が缶詰になるわけだ。
「田辺くん、どうする？」
上司が田辺に声をかける。
「行きます！　先輩に付いていき、勉強させてもらいます！」
田辺は手を挙げて立ち上がる。
「じゃあ、連れていってね」
うっ、と思いながら田辺を見た。いつもと変わらぬ顔をしている。しかしその目は肉食獣のものになっている。これは、まずいことになるかもしれない。捕食されないように気を付けなければと思った。

体験版

◆

支社の社用車を借りて山道を走る。そのあいだ田辺は遠足にでも行くように楽しそうにしていた。

「一週間、共同生活ですね！」

運転席の俺に、助手席の田辺が声をかけてきた。

「いいか、工場には宿直室がある。有事の際に、人が詰めるためのものだ。田辺はその部屋を使え。俺は寝袋を持ってきているから野菜工場で寝る」

「え～、そんなの駄目っすよ。一緒に宿直室で寝てくださいよ。野菜より私と寝た方が絶対いいっすよ」

口を尖らせて主張する。

「仕事とプライベートは分ける方針なんだよ。それに野菜の方が落ち着く。俺は田辺より野菜派だ」

田辺は不満そうな顔をした。

車を駐車場に停めて工場をながめた。外観からトラブルの兆候は見当たらない。

「搬出口を調べたあと中に入ろう」

「暑いっすね。蝉もうるさいし。熊とか出ますか？」

体験版

「出たら任せるよ」
「うっす、私がぶん殴って血路を開きます」
どこまで本気か分からない答えが返ってきた。
工場の搬出口などを回ったが、トラブルの原因らしきものはなかった。車から荷物を出して、扉を抜けて工場に入る。
無人工場は二重構造になっている。外壁と内壁に分かれていて、あいだの空間は温度管理を容易にするための緩衝帯になっている。
建物は三階建てで、外周部分は廊下になっている。この外周部分の入り口近くに、宿直室や管理室が集まっている。搬出口も同じ面にあり、外部との接点をなるべく一ヶ所に集めた構造になっていた。
建物内に入った俺と田辺は足を止めた。入り口近くの壁に、ペンキでQRコードが描かれていたからだ。
「これって……」
田辺がぽかんとした顔をする。
たがいに荷物を下ろして壁を観察した。
「侵入者の形跡だな。まずは証拠写真を撮ろう。あとで見落としていることに気づくかもしれないからな」
「分かりました」

体験版

QRコード以外にも、各所を撮影しておく。一通り目に付くところを記録して振り向くと、田辺がQRコードの前に立っていた。
「どうした？」
「読み取ってタップしたら、なにか変なのが出てきました」
近づき、田辺のスマホをのぞきこむ。『Eゲーム』というゲームのタイトル画面が表示されていた。
「ソシャゲか？」
「こんなの入れていないっすよ」
「マルウェアかもしれないな」
「げっ」
まずったという顔を田辺はする。
「あっ、なんか勝手に始まりました」
人間が入り乱れるムービーが流れたあと、画面が発光した。
周囲の景色が真っ白になるほどの強烈な光が放たれた。不意に目潰しを食らったような状態になった。しばらくまぶしくて動けなかった。
「なんだったんだ今のは」
光は収まったようだが、まだ視界が戻っていない。
「すごい光だったっすね」

体験版

聞いたことのない男の声が聞こえてきた。
目を何度かまたたく。ぼんやりと視界が戻ってきたので、声が聞こえた方に顔を向ける。そこには、破れた服を着た、見慣れぬ男が立っていた。
いや、男は田辺の面影があった。にわかには信じがたいことだが、田辺が男になり、体が大きくなったせいで服が破けたようにしか見えなかった。
「田辺なのか？」
男を見上げながら尋ねる。
「もしかして、先輩なんですか？」
田辺がこちらを見下ろしてきた。
言葉の内容から、自分の姿にも何らかの変化があったことが分かった。
自分の手を見ると小さくなっていた。下を向くと胸が大きくなっていた。背も低くなり、服はぶかぶかになっている。もしやと思い、股間に触れてみた。そこには馴染みの男性器はなかった。
「田辺は男になっている。もしかして俺は女になっているのか？」
「やっぱり先輩なんですね！　めっちゃかわいいっす！」
頬ずりしてきそうだったので距離を置いた。かわいいかどうかは、自分の姿が見えないので何とも言えない。
「スマホを見せてくれ。先ほどの光が原因のようだからな」

体験版

どんなに不可解なことでも、可能性を絞り込んでいけば原因にたどり着ける。いつものトラブルシューティングと同じだ。

田辺がスマホを差し出してきた。二人で画面を確認する。二人分のステータスが表示されている。男性の絵の下には田辺薫と書いてある。女性の絵の下には村上智美と書いてある。それぞれの名前をもじって、男性名、女性名にしてあるようだ。名前の下には、知力、体力、性欲などのステータスも並んでいた。

「田辺の性欲は、俺の二倍ぐらいか」

「みたいっすね！」

恥ずかしがる様子もなく、あっけらかんと声を返す。

項目と数字の下には『ポイント』と書いてある欄があった。

「『０／１００』と書いてあるな。その下には文章か。『ポイントが１００になるまで、ここからは出られません』、どういうことだ？」

俺は田辺を見上げる。

「私にも分からないっす」

「まあ、そうだよな。その下のチャレンジリストというボタンを押してみるか」

とりあえず情報収集しないことには始まらない。怪しいアプリではあるが、今はこれしか手掛かりがない。

ボタンを押した。画面が変わり、リストが表示される。

体験版

――キスをする。1ポイント。
――おっぱいをもむ。1ポイント。
――フェラをする。1ポイント。
内容を見て、顔をしかめる。
「なんだこれは？」
「やってみますか？」
「やらないよ。男女逆転しているなら、やられるのは俺だし」
「キスだったら、立場は同じですよ」
「それよりも『ここからは出られません』という説明の方が気になる。入り口に行って確かめてみよう」
歩こうとすると、ズボンの裾を踏みそうになった。いったん立ち止まり、裾を折り曲げて短くする。
「田辺の服も、あとでなんとかしないといけないな」
「先輩の服を借りるとかですか？」
「そうだな。服を交換した方がよさそうだな」
田辺はなぜか嬉しそうだった。
入り口に着いた。扉を開けようとしたが開かなかった。近くの窓を横にスライドさせて出ようとしたが、不可視の壁があるようで通過することができなかった。スマホは圏外で、

体験版

電話も通じなければ、有線のネットも接続できない。電気はどこからともなく供給されているが、人間が出入りしたり、外部と連絡したりすることはできなくなっていた。
「まいったな」
「そういえば、蝉の声が聞こえないっすね」
耳を澄ます。確かに聞こえない。田辺の方が冷静だなと思う。さて、どうするか。先輩として、後輩の安全を第一に考えないといけない。
「キスしてみますか？」
田辺がスマホをこちらに向けてきた。少し考えたあとため息を漏らす。
「そうだな。手掛かりはこのアプリだけだしな。ただ、粘膜の接触は避けた方がよい。胸にしておこう」
その方がましだと思って触ることを許可した。田辺は背後に回り、両手を前に回しておっぱいに触れてきた。
「なぜ、うしろから触るんだ？」
「その方がもみがいがありますし、先輩が逃げられないですから」
「はあ？」
田辺はゆっくりと手を動かしてもんでくる。時折指先で乳首をいじり、つまんだり、押し潰したりしてきた。
「んんっ！」

体験版

思わず声が出て、逃れようとする。田辺が両手を回しているせいで体の行き場がない。俺が声を出して、身をよじっているのに田辺は愛撫をやめない。執拗におっぱいをもみ、刺激を与えてくる。

「もう、やめろ！」

「やめないっす。先輩の反応が面白いので」

「なにを――」

田辺が右手を俺のあごに移動させた。そのまま上から顔を近づけて唇を重ねてきた。

キスは許可していない！

田辺から離れようとするが、体格も力も田辺の方が上だった。

唇を重ねた田辺は、ちょろちょろと舌で俺の唇をなでてくる。それだけでなく割れ目をこじ開けて舌を入れてこようとする。顔を密着されているせいで息苦しい。息をしようとして口を開くと、田辺の舌が侵入してきた。

口の中をまさぐられて全身に緊張が走る。田辺は慣れた様子で俺の体を愛撫してくる。

股間に指が下りてきた。ズボンの上から指でこすられる。パンツの布地と股間がすれて体に電気が走る。足がガクガクしてきたところで、スマホから音声が流れてきた。

《コングラチュレーション！　チャレンジ『おっぱいもみ』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》

《コングラチュレーション！　チャレンジ『キス』を達成しました。村上智美は1ポイン

体験版

トを獲得しました！》
田辺が愛撫をやめて両手を離した。俺は足の力が抜けて、床にぺたんと尻餅を突く。田辺は俺の横に座ってスマホを操作した。
ぼんやりとした頭で考える。スマホの持ち主は田辺だが、ゲームの主体は俺のようだ。ポイントが入るときに呼ばれたのは俺の名前だ。『Ｅゲーム』は女性が中心のゲームなのかもしれない。誰のスマホなのかは、あまり関係がないようだ。
「先輩、見てください。２ポイント入りました。あと９８ポイントですよ」
キラキラした目で田辺は言う。
「ちょっと待て。こういうのがあと９８回も続くのか？　そもそも１００ポイントになったからといって脱出できる保証はどこにもないぞ」
「それよりも先輩、なにかムラムラしませんか？」
「なに？」
そういえば身体が火照っている気がする。飲んだことはないが、赤まむしドリンクなどを飲むと、こんな感じになるのではないか。
なにか情報がないかと思い、田辺からスマホを奪って『Ｅゲーム』の画面を操作する。タイトル画面に戻ると『Ｅ』の文字の上に、先ほどはなかったルビが出現していた。
「Ｅｓｔｒｕｓか」
頭が痛いと思いながら天を仰ぐ。

体験版

「どういう意味なんですか？」
田辺はこの単語を知らないようだ。
「発情期、性欲が高まる状態や期間、性行動が盛んな時期。いわゆるサカリの状態だ」
「この『Eゲーム』って、登録された人を発情させるんですかね？」
「さあ、どうだろうな」
「チャレンジリストって、どうなったんでしょうね？」
表示してみる。実施したものが消えて、新しい項目が追加されていた。
――フェラをする。1ポイント。
――たがいに裸を見せ合う。1ポイント。
――裸でキスをする。1ポイント。
「なるほど。少しずつ性的経験をさせて交尾に導こうというわけか」
「先輩とセックスなら望むところですよ」
「嫌だよ。今の俺は、ペニスを入れられる側だぞ」
「絶対、気持ちいいと思いますよ」
ため息を吐き、立ち上がる。
「しばらくは、ここから出られそうにないから、着替えた方がよいだろう。田辺の半裸状態をどうにかしないといけないからな。宿直室に行って着替えをするぞ」
「分かりました。二人分の荷物、私が持ちます。先輩は今、女の子ですから」

体験版

田辺は嬉々として荷物を持つ。
悪い子じゃないんだよなあ。そう思いながら田辺とともに宿直室に向かった。

◆

宿直室は四畳半の畳部屋で、部屋の奥には流しとコンロがあった。左手にある押し入れには、二人分のふとんがある。とりあえず部屋の隅に荷物を置き、たがいが持ってきた服を確認することにした。
一週間泊まり込むつもりだったので、俺の方は服を多めに持ってきている。
「田辺の方はどんなだ？」
「こんな感じっす」
鞄から出した服を畳の上に並べていく。女性用スーツの着替えが一着、私服が数着、それにパジャマに下着だ。下着は、レースが入っている派手なものが多かった。
「ずいぶん高そうな下着だな」
「勝負服っす」
「なんの勝負をするつもりだったかは知らんが借りるぞ。どうも、女性の体になってしまったようだからな」
「じゃあ、先輩が今着ている服を、私が着ます」

体験版

「新しいのを着ればいいだろう」
「先輩が着ている服がいいんですよ。においに包まれたいじゃないですか」
「変態か？」
田辺には新しい服を使うように厳命した。
たがいに着る服を選び、背を向けて着替えることにした。
「田辺。このブラジャーというやつは、どうやって着けるんだ？」
上半身裸になったところで先に進めなくなった。
ブラジャーを自分で着けたことはない。他人が着けるのを見たこともない。着けるものだとは知っていたが、どうすればよいのか見当が付かなかった。
「ああ、じゃあ私が教えますね」
田辺がとことこと歩いてきて、俺の前に立った。田辺は、全ての服を脱いでいた。
「ちょ、ちょっと待て。なんで全裸なんだ？」
「そりゃあ、着替えの途中でしたし。おっぱいを出したまま、私の着替えが終わるまで待っていた方がよかったですか？」
「……もういい。おまえに任せるよ」
「じゃあ、先輩も裸になってください。ついでに1ポイント稼いでしまいましょう！」
確かに100ポイントを目指すなら、その方がいい。
「分かった。下も脱げばいいんだな」

体験版

ズボンとパンツを脱いで全裸になった。やっぱり股間には陰茎も睾丸もない。自分が女になったのだとよく分かった。

《コングラチュレーション！　チャレンジ『全裸見せ合い』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》

これで合計3ポイント。残り97ポイントだ。

「それじゃあ、ブラジャーの着け方を教えてくれ」

いきなり田辺が抱きついて唇を重ねてきた。先ほどのキスとは違い、全裸で肌が密着しているせいで、たがいの体温を感じた。

俺は逃げようとしてじたばたする。そうしたら引き寄せられて持ち上げられた。体が浮いたせいで足が空を切る。キスは継続している。股のあいだに指を入れられた。割れ目を指でなでられる。気持ちよくなり、ばたつかせていた足がだらんとなった。

「んんっ――」

体から力が抜けていく。スイッチを切られたように、なにも考えられなくなる。触れ合っている場所の汗のぬめりを感じた。

《コングラチュレーション！　チャレンジ『全裸キス』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》

合計4ポイント獲得。残り96ポイント。ポイントを稼いだから放してくれればいいのに。しかし、田辺は解放してくれない。

体験版

ようやく唇を離してくれた。自由な呼吸を堪能する。
「先輩」
「なんだ、田辺？」
まだ抱きつかれて持ち上げられている。股をなでるのをやめてくれたから、冷静に話をできる。
「おちんちんがカチカチになって痛いです」
切なそうな顔で田辺は訴えてきた。
田辺の股間を見てみた。ペニスが赤黒くなるほど膨張している。これはちょっと見ないほどのふくらみようだ。慣れない勃起のせいで、ペニスに血が集まりすぎているのかもしれない。
「性的刺激と距離を置いた方がいい。まずは俺を放せ」
「いやです。先輩とは離れたくないです」
力をこめて抱き締められる。
「分かった。離れないから、いったん下ろせ。射精すれば収まるから射精させよう」
やっと下ろしてくれた。俺は腰を屈め、田辺のペニスをじっくりと観察する。自分が男だったときのペニスよりも大きい。男として負けていることにショックを受ける。
「田辺、オナニーの仕方は知っているか？」
「手でしごくんですよね？」

体験版

「知っているならやってみろ」
田辺は立ったまま右手でペニスをつかむ。ぎこちなく前後させるが射精にはいたらない。苦しそうだった。これは自分で射精まで導くのは難しそうだなと判断する。
「仕方がない、手伝ってやる」
膝を突いて、両手で田辺の竿を包む。そしてリズミカルに前後に動かしはじめた。
「先輩、どうせなら、ついでにフェラもしてください」
切なそうな声を出しながら田辺は言う。ここを脱出するには１００ポイント稼がないといけない。稼げるときに稼いでおいた方がよいだろう。
亀頭をぺろりとなめた。その瞬間、ペニスの角度が急に上がって、鼻をぺちんと跳ね上げられた。
「田辺のペニス、活きがよすぎだろう」
面食らいながら苦情を言った。
頭を抑えられて鼻をつままれた。息ができず口を開く。その隙間にペニスを押し込まれた。
噛んでやろうかと思ったが、さすがにかわいそうだからやめた。
喉奥にペニスを突っこまれて呼吸ができなくなる。じたばたしていると鼻が解放された。頭を両手で固定されて、腰を動かされる。喉を何度も突かれて嘔吐しそうになった。
「なにか上がってきます」

体験版

そう言った直後、口の奥で精液が発射された。どれだけためていたんだと思うほど、大量のザーメンを注ぎこまれた。

田辺がペニスを引き抜き、ぺたりと座り込む。ペニスが柔らかくなり、ぐんにゃりと曲がっていた。どうやら痛いほどの勃起からは解放されたようだ。

田辺は、はあ、はあ、と言って呼吸を整えている。俺は、口の中の精液をどうしようと思って口を閉じる。どこかにティッシュはないかと思い周囲を見渡す。

「はは、先輩。すごい顔です。口と鼻から精液が垂れています」

誰のせいだよと思う。しかし、口を開けると口内のザーメンが出てしまう。少し垂れたものを両手で受け止めた。この状態では自分の鞄を探ることはできない。

身振りでティッシュを探すように田辺に指示を出す。

「飲みこんでしまえばいいじゃないですか」

「ふー！　ふー！」

しゃべれないので、うなり声を上げて抗議する。

「私、昔の彼氏にフェラしてあげたときは、飲んでいましたよ」

おまえと俺は違う。怒った目を田辺に向ける。

「怒った顔もかわいいですね。そうだ、いい方法がありますよ」

田辺は唇を重ねてきた。なにをする気だと思ったら、口の中の精液を吸い出して自分で飲みこみはじめた。

体験版

「鼻の方も吸いますね」
鼻を口で塞がれて中の精液を吸い出された。
「ふーん、自分の精液って、こんな味なんですね」
なにか、すごいことをされた気がした。その場にぺたりと座り込み、そのまま畳の上に寝転んでしまった。
《コングラチュレーション！　チャレンジ『フェラ』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》
合計5ポイント獲得。残り95ポイントになった。田辺は俺の手についた精液もなめて飲みこんだ。
「あー、先輩、まんこが、びちょびちょになっていますね。私がきれいにしてあげますよ」
田辺が俺の腰をつかみ、女性器に口を重ねてきた。
「ひぃっ」
足のあいだをぺろぺろと犬のようになめる。腰をくねらせて逃げようとしたが、田辺の方が力が強かった。
「もう、放せ。きれいになっただろう！」
「まだっす。なめる先から溢れてきますから」
「それは、おまえが俺の股をなめ続けるからだろう」
「先輩の反応がかわいいんで、続けさせてもらいます」

体験版

絶対に、やめる気がないだろう、おまえ！　俺は心の中で憤った。
「ちょ、ちょっと待った。トイレに行きたくなった！」
股間を刺激されたせいで尿意を催してきた。
「出していいっすよ。私が全部飲みますから」
どんなプレイを過去にしていたんだと突っこみたくなる。
「あっ」
限界を突破した。尿道から液体がちょろちょろと流れ出る。田辺はその場所に口をぴったりと付けて、喉を鳴らして飲み続ける。最後の一滴が出終わったあと、舌で尿道口をなめ取られた。恥ずかしさが込み上げてくる。股に顔を埋められたまま、しばらく呆然とした。
《コングラチュレーション！　チャレンジ『クンニリングス』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》
《コングラチュレーション！　チャレンジ『尿飲み』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》
《コングラチュレーション！　チャレンジ『尿道なめ』を達成しました。村上智美は1ポイントを獲得しました！》
チャレンジリストは確認していなかったが、田辺がやった内容がちょうど追加されていたようだ。

体験版

合計8ポイント獲得。残り92ポイント。この調子なら数日でここから出られるかもしれない。
「田辺、そろそろ解放してくれ」
「先輩のここ、一日中でもなめられますよ」
「いや、いいよ。それよりも服を着よう」
「裸のままでいいじゃないですか」
「工場の故障の原因を調べないといけない。『Eゲーム』に誘導するQRコードがあっただろう。何者かが侵入して、悪さをしている可能性がある。あるいは、その誰かがまだここにいる可能性もある」
へらへらと笑っていた田辺の表情が引き締まった。事態の重要性を飲みこんだようだ。
「先輩は、私が守るっす」
「いいから服を着ろ。まずは工場内を全部確認するぞ」
「はい、分かりました」
田辺にブラジャーの着け方を習い、そのあと女物の服を着た。

体験版

第3章　受容

体験版